

白老の海にはまちの成り立ちがある。
港湾の余白と経済と文化もそこにある。
野望は文化と観光が交差する
「フィッシャーマンズワーフ」！



山岸 奈津子 (やまぎし なつこ) さん

1980年生まれ、札幌出身。星野リゾート・トマムで企画・広報マネージャーを務め、勤続10年を機にフリーランス広報として独立。札幌国際芸術祭、複合型フェス「NoMaps」ほか、企業の広報PRなど、さまざまな業種に携わる。2022年白老町地域おこし協力隊、2023年一般社団法人SHIRAOI PROJECTS（通称 SHIPS）を立ち上げ、地域の魅力づくりや町内の企画広報請負、文化芸術外郭団体の事務局長などを務める。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。38回目となる今回は、白老町にIターンし、行政と地域の間立つ中間支援組織、（一社）SHIRAOI PROJECTSを設立。そして、白老町の海に未来の拠点をつくることを目的とした「SHIRAOI Beach & 海の家プロジェクト」（以下「海の家」と省略）を企画運営している、山岸奈津子さんにお話を聞きました。

白老町を移住先に選んだ理由を教えてください

白老町を選ぶというよりも、ローカルプレイヤーに戻りたいと明確に思っていたことが移住の大きな動機でした。それは2019年から広報担当として関わってきたNoMapsで、地域を本気で愛し頑張っている人たちと出会い、その姿を見て“羨ましい”と思っていたからです。そんな時、白老町で新しいアートプロジェクト「ルーツ&アーツしらおい」に広報担当として札幌から通いのスタイルで関わりました。1年目が終わるころ、もっと白老町に関われたら面白いかもしれないと思うように…。そんな時、町内の複数の方から「地

域おこし協力隊になったらいいのに」と声がかかったんです。じゃあ、やってみようか！これが白老町に移住する直接的な理由ですかね。

「海の家」について教えてください

海の資源をもっと有効に使う方法はないだろうか、海岸や港をもっと楽しく、心地よく使えたらいいなど2023年に白老港の魅力化をテーマにした「シン・白老港プロジェクト」を立ち上げたところから「海の家」の企画は始まりました。

このプロジェクトでは、地域の“顔”のひとつとして、未来の拠点を作り出していくために、白老町の家や港を少しずつ変えていく“実証実験”を行っています。「海」を白老町の重要な文化・観光資源として捉え直していきたいという思いが根底にあります。

「海の家」は夏限定の“地域イベント”ではないのですね

はい、海の家＝海水浴場、だから夏限定と思われるかもしれませんが、違うのです。白老港の一角にある気持ちの良い小さな砂浜を舞台に、地元の人と旅人、子どもと大人、漁業とアート、働く場所と憩う場所など、その境界に生まれる“まじわり”を大切にしながら、経済的にも文化的にも、地域にとって意味のある空間として使っていく仕組みを模索しています。普段は立ち入り禁止エリアの「白老港第三商港区と海岸エリア」にある砂浜を、役場と調整し占有許可をもらい、2025年は仮設の「海の家」を模したコンテナハウス、自由に使えるステージを設置し12日間で約20のプログラムを実施しました。具体的には、SUP体験などのマリナーアクティビティに加え、オープンステージでのライブやアートプロジェクト、ワークショップ。そして地域の飲食・雑貨の出店を実施し、おかげさまで1,500人を超える来場者がありました。「海の家」とは、白老港の一角に、多様な人が集まる場所の象徴と考えてもらえたら、嬉しいですね。

奈津子さんは海が好きなんです

私は札幌で生まれ育ちましたが、「海が好き」と、迷わず言える育ち方をしてきました。幼少期の原体験

は、家族や親戚と海で海水浴やキャンプをすることでした。私にとって「海＝とても楽しい場所」でした。こんな私が白老町に移住して驚いたことは、町民にとって、海と生活の距離が大きく離れていたことでした。地元の人が海に親しむ機会は意外なほど限られていたのです。海水浴文化って、誰にも等しくあるものだと思っていた私には、ショックでしたね。この時に感じた驚き、なぜ？が、海をテーマに活動している理由の一つかもしれません。

そして、広報を^{なりわい}生業としてきた私は、関わるマチの成り立ちを最初にしっかり調べるのが基本スタイルです。よそ者の礼儀と言ってもいいかもしれませんね。調べてみると、白老町は古くから、海と深く関わりながら地域が育まれてきた土地でした。縄文後期から漁労をしていた遺跡も残っていました。「シン・白老港プロジェクト」をきっかけに、少し離れてしまっている白老町の人と海と暮らしの距離を縮めていくことは、地域の成り立ちから見ても自然なことなのではないかと思っています。

協力隊の2年目にSHIPSを作られたのです

はい。地域おこし協力隊は、任期終了後に地域で独立して活動することを求められますが、2年目にそれを達成している状況だったため、地域おこし協力隊としての役割を、「地域の魅力や可能性を拡張していきながらワクワクを生み出すこと」さらに「地域で雇用を生み出すこと」と考え、その足がかりとしてできるだけ早く法人化しようと動きました。また、生意気に聞こえるかもしれませんが、より良いマチを目指す中で、行政だけでは賅いきれないまちづくりの機能・役割を担える法人が必要だと以前から感じたこともあり、非営利型の法人を選択し設立に至りました。が、まだまだ道半ばです。 (2025年11月取材)

インタビュー後記

「白老にはいいものがあるけど、現状はその多くが小粒な気がする。ウポポイに加えてもう一つ受け入れができる大きな装置が必要。それを「海の家」が担えるはずと思っているんです…」と語る奈津子さん。その真剣なまなざしを前に、「地域の未来を本気で考えて行動する“ローカルプレイヤー”で“有言実行の人”だね」と、伝えたくまりました。かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表